

タローマン対スパイダーマン（東映版）

kadochika

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時は1970年代、べらぼうででたらめなものが世界を襲っていた。

そこにやってきたのは、芸術の巨人、タローマン。そして地獄からの使者、スパイダーマン……!?

70年代の二大ヒーローが、全然対決しないお話です。

※pixivにも投稿しています。

目次

「自信なんて気にするな」  
— feat. ノン —

「自信なんて気にするな」 — feat. ノン —

時は1970年代。

でたらめでべらぼうなものが、世界を襲っていた。

奇獣である。

どこからともなく現れ、ビル街を練り歩く巨体。

巨大な横長の頭部には、ばつくりと口が裂けている。

口には大きな牙が並んでいるが、その奇獣の脅威はそこではなかった。

錐のような末広りの身体には手が張り付いており、掌を外界へと向けている。

それはまるで、来るものを全て拒んでいるかのようだ。

「ノン！」

奇獣は短くそう叫ぶと、手の平を激烈に突き出した。

伸びた手の平は、ビルを殴打し、破壊する。

それを近くで見ていた、ビルのオーナーが絶叫する。

「ワシのビルがあゝ！ タローマン以外に壊されるなんてえゝ！」

「シャチョ〜！」

奇獣・ノン。

奇獣は別のビルに向かって、再び両手の平を張った。

舞い上がる粉塵や、飛び散る瓦礫。

逃げ惑う人々。

その頭上を飛んでいく、赤い影があった。

ストリングを巧みに操り、ビルの谷間を跳躍する、怒りの目。

「地獄からの使者！ スパイダーマン!!」

スパイダーマンこと、山城拓也は疾走した。

鉄十字団が相手でなくとも、目の前の危機を放置することは出来ない。

彼は迷うこと無く、ブレスレットに向かって叫んだ。

「マーベラーツ!!」

すると、巨大なスフィックスを思わせる要塞が、雲の向こうから飛

来した。

マーベラーからは飛行可能な高性能自動車・GP-7が射出され、ビルの上から飛び出したスパイダーマンを回収する。

GP-7がマーベラーへと回収されて、コクピットとなる。

「マーベラー、チェンジ！ レオパルドン!!」

彼の音声に合わせて要塞が変形し、機械の巨人・レオパルドンとなった。

奇獣はそれに気づき、レオパルドンに向かって両手の平を高速で突き出す。

「ノン！」

「くっ！」

直撃。バランスを崩しかけ、よろめくレオパルドン。

長引けば周囲の被害も拡大する。

そう考えたスパイダーマンは、レオパルドンの切り札を使った。

「レオパルドン、ソードビツカー!!」

号令とともに、レオパルドンは右脚から射出された巨大な剣を掴み取り、振りかざす。

そして投げ飛ばすと、ソードビツカーは奇獣に当たり、弾き飛ばされた。

「何だと……!?!」

あり得なかった事態に、スパイダーマンは驚愕した。

数々のマシーンベムを葬り去ってきた一撃が、目の前のアバンギャルドな怪物には通用しないのだ。

「アークターナー！」

「アームロケット！」

レオパルドンに搭載された他の兵器でも、奇獣に打撃を与える様子はなかった。

何度も飛び出す平手を回避しきれず、スパイダーマンはうめいた。

「マシーンベムを遥かに上回る頑丈さだということのか……!」

スパイダーマンにとっては知る由もないことだが、頑丈さで弾かれたわけではなかった。

奇獣・ノンは、拒絶の奇獣だった。

与えられるもの、投げ込まれるものを強固に退ける性質が、ソードビッカーすら拒絶したのだ。

だが、そこに、また新たな影が落ちる。

流星のように落ちてきて、ミキサ―車を踏み潰し、立ち上がるその巨体。

白と赤で彩られた細身の体の上に、輝くしかめっ面の太陽が乗っている。

そんな姿だった。

スパイダーマンはそれを見て、感じた。

「何だこれは……!?!」

そう、でたらめな巨人、タローマンである。

タローマンは、そこに向かって高速で伸びてきた奇獣の掌を見逃さなかった。

パァン!

と大きな破裂音を立て、タローマンの突き出した両手の平が衝突する。

奇獣の両手とタローマンの両手が合わさり、上へと弾かれる。

二合、三合、幾度となく打ち合わされる掌。

奇獣とタローマンとが、遊んでいるかのようなようだ。

スパイダーマンは困惑していた。

(何なんだ……何が起きている……)

タローマンは打ち合いに飽きたのか、そこから離れて瓦礫を使い、山を作り始めた。

その背中に向かって、奇獣ノンは痛烈な平手を激突させる。

ドゴオン!

反撃をすることもなく、吹き飛ばされるタローマン。

その光景を、スパイダーマンは操縦席から呆然と見ていた。

転倒したタローマンに対して追撃しようと近づくと、奇獣を見て、彼は我に返った。

謎の巨人が敵か味方か、確かなことは分からない。

だがスパイダーマンは、レオパルドンを動かして攻撃の軌道へと割り込ませた。

「させんー！」

奇獣に対し、レオパルドンの攻撃が通用しない。

スパイダーマンは大きく自信を失っていた。

しかし、それでも逃げることは出来ない。

彼は自身を、復讐者だと定義していた。

だが、それだけの存在でもない。

見逃せないことが目の前で起きれば、自然と体が動く。

動いてしまうのだ。

タローマンは、そんな彼の心が分かった気がした。

人生、やりたいことばかりに取り組めるわけではない。

それでも目の前のことに命をかけて挑めるスパイダーマンの情熱と愛を、素晴らしいと思った。

しかし、そこに、鉄十字団の幹部、アマゾネスが姿を現した。

「今日こそお前の最期だ、スパイダーマン！」

お行き！ マシーンベム、プリント魔人！」

「プリーイイインツ!!」

彼女は箱から手足を生やしたような形態のマシーンベムを放つと、巨大化させた。

マシーンベムは体内の機械を作動させて、超高速で大砲や機関砲を製造した。

そしてそれを、奇獣を押し留めている最中のレオパルドンに向けて一斉に撃った。

衝撃と爆音に、スパイダーマンは苦悶する。

「ぐあああああー！」

「プリーイイインツ!!」

マシーンベムの猛攻は止まない。

さしものレオパルドンも、ダメージが蓄積し始めていた。

危うし、スパイダーマン。

だがその時、猛烈な勢いでそこに立ちはだかる者がいた。

「!?」

そう、鉄壁の巨人、タローマンである。  
タローマンの肉体は砲弾の直撃を受け、次々と貫通されていった。  
スパイダーマンはそれを見て、悲鳴を上げた。

「よ、よせ！ 何てことを！」

タローマンは、これでいいのだと思った。  
義理も義務もなく、ただやりたいと感じたことをやる。

それが善行だったとしても、自分の死に繋がったとしても、それは  
結果に過ぎないのだと。

するとレオパルドンの操縦席に、通信が入った。

コンソールの画面には、パイプをくわえ、髭を生やした眼鏡の紳士  
が映っている。

「スパイダーマン、聞こえていますか？」

突然ですが、私は高津と申します。

タローマンはあなたにこう言いたいのでしよう。

——毎日の生活の中で、実はほとんどの人間は負けてばかりなので  
す。

自分はダメだ、思うような生き方ができないと、ガツカリしている。  
実は、自分に自信を持っている人間など、いないのです。

自信を持っているように見えても、それは見せかけだけのこと。  
人間とは、そのようにみじめなものなのです。

しかしそこで、そのみじめな状況に対して闘う。

その闘いの中にこそ、喜びが感じられるのです。

自信なんて気にするな！

岡本太郎も、そう云っていました」

「……………そうか……………」

あまりの出来事に忘れかけていた、闘志。

スパイダーマンはそれを思い出し、奮い立った。

「うおおおおおっ!!」

レオパルドンの出力をレッドゾーンにまで上昇させ、奇獣を投げ飛ばす。



今度こそ勝利を確信していたアマゾネスは、驚愕した。

「何だと！」

「プリーイイイイン!!」

投げ飛ばされた奇獣が激突し、マシーンベムは悲鳴を上げた。

射撃が止み、奇獣とマシーンベムがもんどり打って、瓦礫の海へと転がる。

態勢を立て直し、レオパルドンとタローマンが並び立つ。

「レオパルドン、ソードビッカー!!」

「芸術は爆発だ！」

ソードビッカーがマシーンベムに突き刺さり、大爆発を起こす。

タローマンの全身全霊が奇獣に注ぎ込まれ、その身体を絵の具のように分解してしまう。

突如現れた奇獣と、鉄十字団の遣わしたマシーンベムは撃破された。

タローマンは何処かへと消え去り、スパイダーマンもマーベラーを帰還させた。

山城拓也は異様な巨人のことを、喉に引っかけた魚の小骨のように思い出していた。

(タローマン……何者なんだ彼は……)

彼は絶対に理解できない謎を反芻するのを止め、愛車のアクセルを踏んで帰路についた。

自信なんて気にするな——T A R O